

んだ、奈良に居つて思ふこと多し、あゝ奈良、三山亭、二週間。

自分はよくも脚氣になつたことだ、こんなことを思ふと嬉しい、けれどけれど、自分が今年鎌倉へ行つたらどれだけ上手になつて歸ることが出来ただろう、思ふと思ふと口惜しい、そこで、來年は何處に開かれても、行きたい行きたい、行つて大下先生と一日でも日をおくつて見たい、自分は自分で満足の出来る水彩畫を描ける腕が出来たのは、自分の小さい幼い時に畫紙を下さつた藤島武二先生でない、また鹿子木先生でもない、大下先生だ、何故にまた自分は、この三山亭で斯んなに悶へるんだらう武二先生は愛知の中學に居られた時、京都に居られた時、あの畫紙を下さつた、そして何か描いてくれと云はれた時は、水彩畫といふてどんなものか知らなんだ、それを自然的に教へて下さつたのが大下先生だ、斯なことを思つた三山亭は、自分は畫のために生きて居るのでない、畫を生かしてやろうと思つて居つたに相違ない……………。

三山亭は落日は、あゝ、もう室の内がくらくなつた、今日は朝から二枚も寫生が出来たので、それに満足して、日中は葉山君と畫の批評をして遊んで居る、それにも倦んで、何となし自分は興奮して居つたから、三山亭よりとして何か、『みづゑ』に出したくなつて、ここまで書き終つた。

(附)奈良での畫題は一番公園地を多く描いた、草若山は三度も描いた、杉の古木は何度失敗したか知れぬ、一番ものになつたのが、大佛の古門、二月堂、奈良の町、等であつた。

短歌折々記

一輪の花の一つもまたぬ日を茂りて老ひてゆく日かな
しむ

夜は更けて更けて夜はまた更けはてゝ心うれしき朝と
なりぬ

セコンドの七時となりぬ八時―九時夜はさながら魂奪
ひゆく

うつらうつら夢は心のくらがりにつさはしと見て覺め
たる朝や

何となく唯何となく短夜をいつはるに似てなつかしき
かな

旅やがて倦みし心をなだめるか奈良の朝毎霞こめたる

日本水彩畫會新會友

福井縣吉田郡森田村溫故尋常小學校

平井要

韓國龍山鐵道官舎六十八號ノ二

栗本正隆

韓國龍山鐵道官舎六十八號ノ二

吳藤林二郎

神戸市葺合町千八百九十三

津川清平

靜岡縣富士郡今泉村

加藤一松

福井縣阪井郡三國町元新

小林幾太

栃木縣安蘇郡氷室村齋藤氏方

江西藤十